

1920年代「狂乱の時代」の登場人物たち

間瀬幸江

Mase Yukie 宮城学院女子大学教授

第8回

マリー・ヴァシリエフとは誰だったのか ——小さな妖精の声を聴く

マリー・ヴァシリエフ(1884–1957)。日本では知名度が低いですが、彼女もまた狂乱の時代を支えた立役者の1人である。

1884年にロシアのスモレンスクに生まれ、1905年にフランスへ渡った。パリではマティスに師事し、キュビズムの画家として作品を発表して高い評価を得ると同時に、私設の美術学校「エコール・ヴァシリエフ」を運営した。さらに、エコール・ド・パリの若き画家たちや、第一次世界大戦で障害を負った人々のため、自ら食堂を切り盛りした。人形を作り、ポスターを手掛け、劇場で舞台美術を担うなど、まさにマルチタレントであった。

戦後は人々の記憶から遠のいていたが、風向きが変わったのは20世紀末。パリ市がヴァシリエフのアトリエのあったメヌ通り21番地の建物を整備し、美術館として開館したのである。2016年には「ヴァシリエフ館」と改称され、現代美術の文化センターの役割を担った。2022年からは、2014年設立の非営利団体AWARE (Archives of Women Artists, Research & Exhibitions) の活動拠点となっている。

アトリエ跡地の復権に呼応するようにして、画家ヴァシリエフの再評価も進んだ。2016年に出版された図録(下図)には、キュビズムの文法で描かれた裸婦画や、ロシア正教のイコンを思わせる重厚な肖像画などが収められている。人形作家としてもモダンで特異なスタイルがある。観る者を強く引き込む独創性の表現者ヴァシリエフはなぜ、フジタやモディリアーニ、パスキン、ユトリロなど同時代の

画家たちとは異なり、最近まで忘れられていたのだろうか。

思いつく理由は2つ。第1に、彼女が女性であったこと。女性の画家が存在しなかったのではなく、彼女たちの作品を作品として評価し、それを後世に伝える枠組みがそもそもなかった。AWARE代表で歴史家のカミーユ・モリノーは言う。「なんと長いこと私たちは、女性の芸術家はほとんどいないと思いこんできたのか」と。

第2に、ヴァシリエフの生き方は、先人の誰にも似ていなかった。「巨匠」を気取ることもなく、社会が押し付ける「女性らしさ」の鑄型にも囚われなかった。スパイの嫌疑をかけられたり、滞在許可の取得に苦労するなど、異邦人であるがゆえに災難の絶えない日々を過ごしながらも、困窮する仲間たちの役に立ちたいと定食屋を続け、後進のために学校を続け、子どもや友人の笑顔の似姿を人形にして贈り続けた。ヴァシリエフはどこか、日本のかつての「主婦」のイメージに重なる。育児は「ワンオペ」が当たり前で、家族の弁当を作り、衣服を自作し、ただ家族のための日常を送る。その労働は報酬を伴わず、認知もされない。

芸術作品の「質」や「価値」とは一体何なのだろうと思う。確かに、作品それ自体を見ることこそ大切という

専門家の意見もわかる。しかし私はそれ以上に、彼女自身の声に耳を傾けたい。「私はマリー・ヴァシリエフ。小さくて、金髪で、ぽっちゃりして、灰色の大きな瞳と、とても短い髪。もう20年もパリで暮らしてる。ここは地獄でもあり唯一無二の天国でもあるわ」

小柄な妖精の残した作品には、自分自身であり続けた表現者の姿がほの見える。

Claude Bernès et Benoît Noël, Marie Vassilieff (1884-1957). *L'œuvre artistique*. Lacadémie de peinture. La cantine de Montparnasse. Éditions BVR, 2016.

2016年出版のヴァシリエフ図録。自作の人形を抱いた自画像が表紙である



大修館書店『英語教育』11月号掲載
転載禁止



AWARE内のヴァシリエフに関するサイトはQRコード参照